

チーフテスターの アルバム 18

笹目二郎

今月はフランスの商用車についてです。フランス南部には、海岸線やアルプスの峰々などが連なり、アップダウンの激しい曲折した道が続きます。ここではホットハッチだけではなく、後半部を荷重にしたフルゴネットなども同様に侮り難い性能を発揮します。ただのOHV4気筒でも、件のロングストロークの特性を生かした設定は、低回転からトルクはモリモリですから、それほど高回転まで回さずともせいぜい3000~5500rpmあたりで使っても、結構な速度を維持できます。もともと小排気量に親しんでいる彼らは、低いギアでも目一杯回すことに慣れていて、きちんと使い切ります。一般

的に商用車のギア比は低速用で比較的ワイドですが、2速で120km/hにも達するような長閑なものではなく、70~80km/hまで引っ張ればあとは3速の守備範囲が早期に訪れます。これがタイトなコーナーの連続で威力を発揮し、意外と高いアベレージを維持してくれます。Dレンジに入れっぱなしでゾロゾロ繋がって走ることに満足する国とは違い、隙あらば追い越そうと虎視眈々と狙っています。大排気量にモノを言わせてサッと追い越すのではなく、パワーにそれほど差がない車同士では、やはり追い越しのテクニックも必要です。ピツパリ背後についてウロウロしてもダメで、少し車間距離が開いている間から狙いを定め、一気に詰めてコーナー出口で追い越すスピードを確保する必要があります。横に並んで、なおかつ速度差を認めれば、前を明け渡すのに潔く意地悪なことはしません。この時、追い越した瞬間に運転席を覗くと女性だったりして驚かされることがあります。運転のレベルが高いことも、フランス人やイタリア人、スペイン人などラテンの人々の特徴でしょうか。

何年か前になりますが、カミオンから競技車まで、ルノー各車が全部用意されていて、それをマートラの試験場で乗るチャンスがありました。コースはサーキットのような特設路ではなく一般道の路面ミューで、連絡路のような部分を繋げただけの一方通行路でした。日本のメーカーで言う評価路のようなものです。そこでトラック系列の面白さを知りました。乗り心地の良さはトラックと言えどもフランス車です。ガツンと直接的な突き上げはないし、何と言ってもポトミグ的な大入力に対して、すっきり1度で収めてしまう包容力には感服しました。村や街の出入口によくある、速度低下を強制するあの盛り上げに対して、決して飛び跳ねずに見事に収めてしまう例をあまり知りません。と言うより、予め速度を落として進入するのが普通ですから、そこまで攻めたことはありませんでした。大抵は“あっ、しまった!”と思って首をすくめるわけです。でもフランス車はフランス車ですから、荷重変動に対して寛容なことは言うまでもありません。単に硬くするだけではなく、豊富なストロークで対応するのももちろん、ロールして接地させるサスペンションの幾何学的な配置が適切だからで、それがコーナーでも速い要因のひとつでした。同じコースを様々な車種で乗り比べても、それほど速さに差がないことも驚きでした。商用車にはある意味、スポーツカーに匹敵する面白さがあると思います。

笹目二郎

自動車メーカーでテストドライバーとして車両開発に携わった後、カーグラフィック編集部に加わる。チーフテスターとして数々のスーパースポーツのフルテストを担当。現在はフリーランスのモータージャーナリストとして活躍中である。



photo : CG library